

仙台文学館ニュース

Sendai Literature Museum News



月浦



『侍』
(1980年 新潮社)

出航
文学のある風景

入江を出た瞬間、一昨日はじめて見た大船がふたたび眼に飛びこんできた。それは侍が今日まで見たすべての和船などと比べられるものではなかった。城塞の石垣のように船首は眼前にそびえ、船首の先に槍のような竜骨が青空を刺し、無数の帆綱をつけ、十字架状に組まれた親柱に大きな帆がしっかりと巻かれていた。(中略)

ゆるる縄梯子なはしを伝って一同は次々と甲板に上る。甲板は三層になっていて上甲板では蟻のように日本人の水手たちが動きまわっている。二層目の甲板に、胴の間に入る入口があった。そこから皆はそれぞれ割り当てられた船室におりるのである。使者衆たちは船首にちかい春慶塗りの小室が与えられた。(中略)

侍もあまたの商人たちにまじり与蔵、清八、一助、大助の供の衆と肩をならべ、これから別れねばならぬ牡鹿の山々を見つめた。五月の樹木は既に色濃く、山を覆っていた。これが彼が当分は見ることのできる最後の日本の風景である。突然、まぶたに谷戸の丘陵、村々、そして自分の家形、馬小屋、りくの顔がひとつ、ひとつと甦り、子供たちは今、何をしているのかとせつなく思った。大きなよめきが上甲板から起った。エスパニヤ人の船員たちが妙な節まわしで唄のようなものを歌っている。親柱に日本人の水手が数人のぼり、エスパニヤ人の船員の指図を受けて今、大きな旗にも似た帆をおろす瞬間だった。帆綱が帆み、白い海猫が猫のような声をあげた。やがて誰もが気づかぬうちに大船はゆっくりと船の向きを変えていた。波が船腹にぶつかる音で侍は、運命が今、はじまる、と思った。

(遠藤周作『侍』)

小池 光の 気になる日本語

14

「まどろい」

埼玉の学校教師になったとき、ことばが通じないときがあった。関東と東北は微妙に違うのである。

朝のホームルームに行ったら、教室隅のゴミ箱がゴミでいっぱいになっている。昨日の教室当番がゴミを捨てたのをサボったのである。それで怒って「昨日の日直は誰か、すぐにゴミを捨ててこい」と言った。生徒たちはぼかんとしている。語気を強めて、再度「ゴミ投げてこい」と言うと、一人の生徒がおらずと「ゴミはどこへ投げるのか、窓から投げていいの」と言うので、そこではと分かった。確かに「投げる」はへんなのである。「捨ててこい」といわなければならぬ。

仙台弁では捨てることを投げるという。今でも言うのであろうか、言うのであろう。思えばなつかしい。情報、交通の目まぐるしい発達によって日本中が均質化して、ことばもみな標準語になった。方言がどしどし駆逐されていくのはさびしい、差異がなくなっておもしろくない。旅行してもその土地土地のことばが聞けなくなるのは残念である。

じめからボキャブラリーが違う、味わいふかいことばがたくさんある。「もぞこい」などというのはその最たるものだろう。可哀想である、ミゼラブルである、いとおいしいものである、といった微妙なニュアンスが混合されていて標準語には置き換えることができないと思える。

わたしの祖母の姉という人が近くにおいて、幼いときからわが孫のように可愛がられた。父が死んだとき、そのおばあさんから、

「ひかるは、もぞこい」と言われて深く身に沁みだ。お前はもぞこい奴だ、もぞこくてもぞこくてもならねえ、と言うのであった。もう四十何年も前のことだが、このときのことばをはっきりと思い出す。「もぞこい」がこれ以上ない慰めと励みになって、思わず頭を垂れたのであった。おばあさんはもう百歳近くになっていた。

ことばは人間の感情そのものであって、そのことばがなくなればその感情がなくなる。方言を大切なものと考えたいし、滅びさせたくない。「もぞこい」なんて語源は全く不明だが、まきれなく傑作の一語で、全国に誇るべきことばと思う。

学芸室日記

○4月20日(土)から6月9日(日)まで開催した特別展「正岡子規みちのくの旅～はて知らずの記」。松山市立子規記念博物館や東京の根岸の子規庵保存会などの協力をいただき、「はて知らずの記」の草稿はじめ、子規の使用した硯や地球儀など、子規を身近に感じることのできる貴重な資料をご紹介します。また館内では、子規の随筆「小園の記」にちなみ、そこに記



される花々を集めご覧いただきました。バラや牡丹の香がほのかに漂う心癒される空間に、足を止めるお客様の姿が見られました。

○春の特別展はちょうど、仙台・宮城デスティネーションキャンペーン期間にあたりました。当館も加盟している、SMMA(仙台宮城ミュージアムアライアンス)では「伊達なバス旅」ツアーを企画。当館は特別展にかけて「はて知らずの旅～松尾芭蕉と正岡子規の足跡を辿る」を開催しました。朝8時前から夕方4時まで、仙台、松島、塩竈を回るというハードスケジュールで欲張りなお客様

様もあり、無事終了。ツアーガイドとして同行した庄司学芸員の解説も皆さまに喜ばれました。



○4月下旬、夏休みの企画の人形が文学館にやってきました。細長い段ボールに入っていた人形は、木や和紙、毛糸など様々な素材で作られ、一つとして同じものがありません。生みの親の山村エナミさんは、一つ一つの人形について楽しそうに説明



をしてくださいました。梱包材から出された人形たちは、じつところの様子をうかがっているかのように、写真を撮るために棒をもって立てると、とたんに生き生きとし始めたのでした。



宮沢賢治 「雪わたり」



宮沢賢治 「雪わたり」 (岩崎書店)

カムパネルラ? ジョバンニ? ケンタウル祭??
「……この国のおはなしなんだよ。え、となりの岩手けんがうんだ、いだいなサッカさんがつくったどうわなんだって?」

仙台市立東六番丁小学校入



学式直後、一年六組の教室に行ってみると、黒板には「雨ニモマケズ 風ニモマケズ……」の一節が白チョークで書かれていた。子ども心に、学校とは菌をくいしばってがんばって通わなければいけないところなんだと勝手に解釈した。

そしてカムパネルラ、ジョバンニである。たまたま担任教諭が宮沢賢治に傾倒していたのか、それとも隣県岩手に対するライバル意識か、連日「銀河鉄道の夜」の読みかせである。幼稚園にでも通っていたならば、読みかせされることに慣れていたのだろうか、家でもまったくしてなかったことがない。とよたかずひこは、お話の筋も理解できぬまま、延々続くこの時間が苦痛であった。そして次は映画だ。「風の又三郎」。暗幕を張った講堂に一年生(六〇〇人)が集められて映画鑑賞。

「……げんとう会にはきつといらつしやい。このつぎの雪のおつた月夜のぼんです。八時から始めますから、入場けんをあげておきましょう。なんまいあげましょうか。」
「そんなら五まいおくれ。」
「……この会話のやりとりが結構長い。入場券の前におだん

の絵巻話集、それも一年生から楽しく読めるお話、と銘うって出すんですが、とよたさんそのうちの二巻を担当してもらえませんか。」
九年前、岩崎書店編集部から電話があった。それまでも他の作家さんの文に絵を描く仕事をしていたが、自分としてはあまり成功したとは思えなかった。絵本作家を評して、絵も文も同時にやってみてほしいと、逆言ってくださる方がいるが、逆に言えば、自分が描ける絵の範囲でお話を創っているともいえる。

他の作家の作品世界に絵で入り込むには、じょうぶな菌と胃袋が必要である。文章を噛み砕き、咀嚼し、消化して、そして一体作品として昇華させるのである。引き受けた以上、内容の好き嫌いなんでいていいられない。絵本画家の方が、よっぽど力業を要求されるのではないかと常々思っている。今回はあの宮沢賢治である。きくと全10巻、全体のアート

ディレクションは和田誠氏が手がけるといふ。心が動いた。「やらせてください。」即答である。
数日後、また連絡があった。「注文の多い料理店」は和田誠氏、他の作品も絵本作家さんの強い要望があつて、村上康成氏「よだかの星」、ささめやゆき氏「セロひきのゴージュ」、高島純氏「どんぐりと山ねこ」、長谷川義史氏「オツベルと象」……早い者勝ちで作品の奪い合いになつていくらしい。

「……ボクは残りものの作品で結構です。」
殊勝な返事だが、東六小時代のいきさつが大きい。絵本作家にも賢治ファンが多いことを改めて認識させられた。「雪わたり」が私の担当になった。このメンバーで私だけが東北生まれの東北育ちだ。「かた雪かっこ、しみ雪しんこ。」……
描けるかもしれない。
和田誠氏がアートディレクションを引き受ける条件、底本



ごをあげる話もしている。小ギツネは、だんごや券をいっただいからだのどに忍ばせていたんだらう? 絵本ならどこのイメージを切り取って一画面でいけるが、この絵巻話では四見聞き分ある。コマ割り絵のような展開になる。あまり理屈っぽく考えなくてもいいと思いつつも、小ギツネの首から、ずた袋をかけることにした。
後世の人間が勝手に絵を添えるなんて、賢治本人にとってはいい迷惑であろう。お話として完結しているのである。私の表現方法でよかったかどうかはわからない。

つい先日、第15刷りの重版通知が届いた。絵を含めて受け入れられて、それなりに売れ続けてくれているらしい。ありがたいことだ。
来月の九月、秋田の大館で講演会がある。盛岡駅まで新幹線で行って、そこから高速バ

スを利用するのが一番早いらしい。JR時刻表を操る。盛岡駅以北、青森県境までの東北本線はいつの間にかIGRいわて銀河鉄道となつている。これは乗ってみるしかあるまい。

とよたかずひこ(豊田一彦) 絵本作家
1947年、宮城県生まれ。早稲田大学第一文学部卒業。イラストレーターを経て絵本作家に。1997年『でんしゃのつて』(アリス館)が厚生省中央児童福祉審議会児童文化財特別推薦を受ける。「どんどこももんちゃん」(童心社)で第7回日本絵本賞受賞。「あめですよ」が小学1年生の国語の教科書(東京書籍)に採用される。主な作品に「バルボンさんのおでかけ」などの「ワニのバルボン」シリーズ、「プッピーバス」などの「あかちゃんのものえほん」シリーズ(以上アリス館)、「やまのおふろやさん」などの「ぼかぼかおふろ」シリーズ(ひさかたチャイルド)、「ももんちゃんあそぼう」シリーズ、「おにぎりくんがね」などの「おいしいともだち」シリーズ(以上童心社)などがある。新刊は「ばしゃのつて」(アリス館)。



とよたかずひこさんと「仙台文学館」

今年で14回目を数える「こども文学館えほんのひろば」。2000年に開催した第1回目はとよたかずひこさんの原画展でした。



チラシには「おととつと」(岩崎書店)のしろくま親子を使用。扉を開けると、えほんのひろばの見取り図になっていました。

『でんしゃのつて』、『おととつと』、『バルボンさんのおでかけ』など、とよたさんの絵本の原画をご紹介します。またアイデアノートや、ダミー本の展示ほか、絵本ができるまでの過程を、とよたさんの直筆解説付きで紹介しました。色指定の制作の段階が分かるしかけなどのアイデアをいただきながら作り上げた、賑やかで楽しい展示でした。



ミュージアムグッズ

とよたさんが当館のために描きおろした、かわいいイラストでミュージアムグッズを作りました。当館の受付にて販売中です。シール(2枚セット)300円、ノート各400円。



星野富弘 花の詩画展

二〇一三年十月二十五日(金)〜十二月二十三日(月・祝)

普段何気なく目になっている道端の草花に思いを託し絵を描く。詩人で画家の星野富弘さんは、群馬大学病院に入院中、唯一動かせる口を使って文字や絵を描き始めました。中学校の新任教師として赴任して二カ月、覇気あふれる夢と希望は体操の模範演技の最中に起きた事故によって、一転暗鬱たる世界に変わりました。闘病生活と動けないいらだちの中、自

暴自棄になることもあったといいます。しかし家族や周囲の「あきらめない心」によって、星野さんは口にペンをくわえて文字を書き始めました。そして、手紙に花の絵を描き、その後花の絵に詩が添えられるようになりました。

星野さんの視点は、華やかなものだけに注目することなく、私たちのすぐそばにある野の草花、たとえばタンポポやべんべん草などのような小さな草花に心を通わせ、その美しさを丹念に表現してゆきます。その姿勢は、「目にみえるものを支えている 目にみえないものも大切なもの」「愛、深き淵より」からの存在を、私たちに訴えているかのようです。

本展では、星野さんの温かな眼差しを通して描かれた詩画一〇〇点を紹介します。また、作品に込められた「想い」を、音声と映像でもお届けします。作品に宿る、静かで力強いメッセージを、ぜひ受け取ってください。



「がくあじさい」(1981)

はるばるの朝顔、こぼれおこした
朝顔を洗うとき
私の顔
すくすくおぼろに
体を持ち上げると
私さきほくすくすく
結露のび輪
いくばくも
合・レ・キ
カーテン
「すくすくおぼろ」
朝顔の中
私の許にきたあなだ
泣きながら冷たい水をすすっている
その十本の指先から
金糸も 銀糸も
美しい糸が、落ちてくる

神菜がたった一度だけ
この腕を力かして下ろすと
母の肩をたたかせるもろあつ
風に揺れる。くさくさ
実を見ていたら
そんな日が本当に
来るような気がした



「べんべんぐさ」(1979)



「小さな実」(1993)



「支えられて」(1993)

会期中のイベント

水彩画ワークショップや作品の朗読などを予定しています。



富弘美術館

1991年に開館。社会福祉会館を改造した建物でスタートしましたが、老朽化が進み、また団体客を受け入れるには構造上無理があったことから、2005年に新しい美術館に建て替えられました。世界中から設計案が寄せられ、公開審査で選ばれた新しい美術館はシャボン玉からヒントを得たもので、展示室や事務室、トイレまでもが円形で、廊下がないというユニークな構造です。

〒376-0302
群馬県みどり市東町草木 86

☎ 0277-95-6333

開館時間:午前9時〜午後5時

(入館は午後4時30分まで)

休館日:12月〜3月までの月曜日、月曜日が祝日の場合は火曜日、12月26日〜1月4日

入館料:大人500円、小中学生300円
(特別展の場合は別料金になることがあります)



星野富弘(ほしのとみひろ)



一九四六年、群馬県生まれ。群馬大学教育学部卒業後、中学校の教諭になるがクラブ活動の指導中、頸髄を損傷し手足の自由を失う。一九七二年、群馬大学病院に入院中、口に筆をくわえて文や絵を書き始める。一九七四年、病室でキリスト教の洗礼を受ける。一九七九年、前橋で最初の作品展を開く。一九八一年、結婚。自宅で雑誌や新聞に詩画作品やエッセイの連載を始める。一九八二年、高崎で「花の詩画展」を開催。以後、全国各地、またニューヨークやロサンゼルス、ワルシャワなど海外でも開催される。一九九一年、ふるさと群馬県勢多郡東村(現みどり市東町)に村立富弘美術館が開館。二〇〇六年、群馬県名誉県民の称号を授与され、二〇一二年には群馬大学特別栄誉賞を受賞。詩画や随筆は教科書にも掲載され、また詩は曲がつけられ多くの人に歌われている。



新版『愛、深き淵より』
(二〇〇〇年、株式会社学研パブリッシング)



『山に向いの美術館』
(二〇〇五年、富弘美術館)



新編『四季抄 風の旅』
(二〇〇九年、株式会社学研パブリッシング)

こども文学館
えほんのひろば
人形がいっぱい!
山村エナミの世界

今年のもとも文学館えほんのひろばでは、仙台出身の人形美術家・デザイナーの山村エナミさんの人形をご紹介していきます。四十年にわたって人形劇団ブークを始め、「おにたのぼうし」「長くつ下のピッピ」など、NHK教育テレビや民放の



子ども向け番組の人形制作にかかわってきた山村さんが手がけた人形たちが展示室に集合。また、小道具や貴重なデザイン画などもご覧いただけます。今にも話しかけてきそうなチャームिंगな人形たちに会いにきませんか。八月二十五日(日)まで開催。

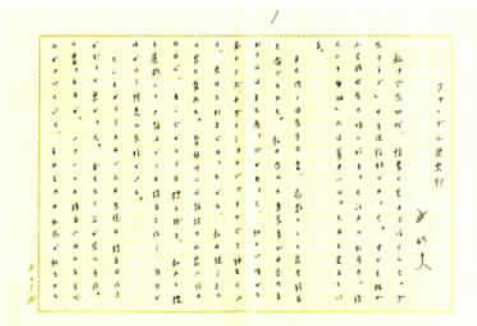


新資料紹介
必見
秋のお出かけ企画
「ようこそ!
寄贈資料展へ」

当館では一九九九年の開館以来、多くの方々から書籍や雑誌、文学者の原稿や、書簡、色紙、短冊など貴重な資料をご寄贈いただいています。開館十周年を迎えた二〇〇九年に「寄贈資料展」としてご紹介しましたが、その後も新たな資料をご寄贈いただいています。今回はそれらを中心に紹介いたします。それぞれの資料が持つ背景やゆかりに思いを馳せてみてはいかがでしょうか。



「北辰民報」掲載記事差し止め関係資料
「北辰民報」は、宮城県の大河原で昭和初期から発行されていた雑誌。治安維持法に基づき1929(昭和4)年から1938(昭和13)年までに出版された。記事差し止め命令書と差し止め解除通知書などが大量に残されていました。



北杜夫原稿「ファブル昆虫記」
「仙台文学館ニュース」第13号(2008年1月)の「私の一冊」にご寄稿いただいた時の原稿です。



松本清張自像
編集者だった方の資料でした。画帖に描かれていて、他に大佛次郎のサインなどもあります。

■会 期:二〇一三年九月十四日(土)
十月十四日(月・祝)
■観覧料:一般四〇〇円
高校生二〇〇円
小・中学生一〇〇円

仙台文学館ゼミナール
現代詩
実作鑑賞講座

二〇〇七年より開催している「仙台文学館ゼミナール」。「近代文学を読み解くコース」「現代文学を探究するコース」「日本の古典に親しむコース」「表現をみがくコース」の四本柱で構成されています。十一ある講座には、毎年多くの方が参加されています。今年度の「表現をみがくコース」では、「現代詩実作鑑賞講座」を新設しました。詩を楽しみたい、詩の表現についてもっと学びたい、心に浮かんでくる思いを詩の言葉にしたい...という方の思いを受け止めるべくスタートした本講座には、二十五人の方が集まりました。詩人の清岳こうさんのもと、毎回積極的



人が、詩の世界と向き合っています。
講師から一言
六月、講座が始まりました。入門編もそこそこに、さっそく実作。最初は山梨県で開催される国民文化祭に応募する作品を数人が書きました。もちろん、鑑賞に徹する人、実作に悪戦苦闘の人、沈黙考の人、いろいろ。厳しい意見、拍手、共感、笑いの中、結果はともあれ、まずは挑戦です。今年最後のしめくくりは詩の朗読・展覧会としゃれこみたいところですが、乞(ご)ご期待。

今も人気作家の上位に名前が挙がる「夏目漱石」。その漱石作品の魅力をも解くゼミナールを昨年度から開催しています。「漱石は二十世紀の現在でも現役作家」と評する東京大学教授の小森陽一さんが、漱石作品の誕生の背景、作品が書かれた同時代的状況、そして作品の持つ今日的意味、普遍性などを読み解くもので、二〇一二年は「吾輩は猫である」、「草枕」、「三四郎」、「それから」、「門」を取り上げました。この講座は大好評で募集定員を大幅に超える申し込みがあり、ご参加いただけない方が沢山いらっしゃいました。現在、二〇一二年の講座の内容をまとめたものに、小森さんと小池館長の対談を新たに収録した書籍を制作中です。刊行は秋を予定しています。講座に参加された方も、惜しくも涙

ミュージアムグッズ
新しい
ミュージアムグッズ
が間もなく完成!



本ニュースの創刊以来「私の一冊」の挿絵を担当している、水彩画家・イラストレーターの古山拓さんに、当館オリジナルの作品を描いていただいています。作品は今後、一筆箋や絵はがきになる予定です。また、二〇〇九年に毛糸を圧縮したブックマークを作っていた、染色家の神田美穂さんから、文学館の森をイメージした、ちょっと風変わりな素敵な作品も届きます。どちらも秋からの販売を予定しています。完成の際は当館ホームページでもご紹介いたしますので、どうぞお楽しみに。

杜の小径

現在、喫茶「杜の小径」では「慶長遣欧使節船出帆400年」を記念して、特別メニューの「常長の旅の味」を提供中です。宮城の食材を生かしたメニューは、鮭のホワイトソースがけ、玉ねぎとキャベツのポタージュ、仙台味噌と青ばた豆の炒めもの、スパゲッティに、ノンアルコールワインが付きます。食材は季節によって変わりますが、今年一杯お楽しみいただけます。ご来館の折にはぜひご賞味ください。

